

11 奉神礼基礎講座 奉神礼の流れと選曲「領聖前に何を歌うか」

Slide 1

みなさんこんにちは、第11回奉神礼基礎講座、実技編です。  
 今日は、結構悩んでおられる方の多いテーマ、「信徒領聖前つまり神品領聖を待つ時間に何を歌えばいいか」を考えます。正教会では基本的に、「何を歌うか」は祈祷書やティピコンという奉事規則に決められていますが、この部分には明確な規程がありません。だからと言って何でもいいともいわず、聖歌担当者を悩ませています。今日は、「どんな歌がふさわしいか、あるいはふさわしくないのか」を考える時の指針を、奉神礼と信仰生活のサイクル、流れという観点から考えてみたいと思います。



1

Slide 2

祈祷書には、「領聖の歌」として、その日の「領聖詞」キノニクが載っています。キノニクについては次回詳しくお話ししたいと思います。概ね聖詠の句とアリルイヤで、全部で26種類あります。たとえば「ハリストスの聖体を受け、不死の泉を飲めよ」。これは信徒領聖の時に歌われていますが、もともと祈祷書の上では復活祭のキノニクです。日曜日のキノニクは148聖詠「天より主をほめ上げよ、至高きに彼をほめ上げよ」です。最も古いキノニクは33聖詠「味わえよ、主のいかに仁慈なるを見ん」で、4世紀から歌われ今は先備聖体礼儀のキノニクです。



2

Slide 3

キリスト教のごく初期、聖体礼儀が小さな集まりで聖職者も信徒も1つのテーブルを囲んで一緒にご聖体を受けていたころは、特別の歌は必要ありませんでした。キリスト教が国の宗教になり、聖堂や礼拝規模が大きくなり、神品と信徒が別々に領聖するようになると、神品領聖の時間を埋めるために、何らかの歌が必要になったと思われまます。何も歌わずに、黙って待っていればいいのですが、何もないと、「おしゃべり」が始まってしまうのが世の常で、聖堂がザワザワしても困るから何かが必要になったのだろうと考えられます。アナフォラの黙唱祝文の時、歌を被せるようになったのと同じ理由でしょう。



3

ではどんな方法があるか。領聖詞は聖詠の1句で、短いですから、領聖詞を繰り返す、聖詠に挟み込んで繰り返します。10世紀ぐらいまではこの方法がとられていました。

もう少し後の時代、12世紀以後になると、飾りの節回しをたくさんつけて、引き延ばす方法がとられました。ギリシアなどでは今も行われています。こんな感じです。

♪スタブロボレオス♪

これはルーマニアのビザンティン聖歌のグループが来日したときのもので、「こぶし」のような装飾がついています。15分でも20分でも、いくらでも引き延ばせると言っていました。

飾りをつけて引き延ばす方法はロシアにも伝えられました 17世紀以前の古いロシア聖歌です。「我、救いの爵を受けて、主の名を呼ばん」

♪ズナメニイ、「我救いの爵を受けて」

Slide4

17世紀になると西洋音楽の影響が入ってきます。革命前のロシアでは、領聖詞をまっすぐに、ささっと歌って、あとは自由に作曲された合唱コンチェルトや好みの歌が歌われるようになりました。コンチェルトとはその名のとおり、「コンサート」用で、適当な聖詠を歌詞にした大規模な合唱曲です。



西洋指向の強かったペテルブルグの宮廷では外国人音楽家を招いたり、若手音楽家をイタリアに留学させたりして、西洋音楽を取り入れることに熱心で、西洋近代の「人間中心主義」の考え方まで取り込み、人の「好み」で選ぶことが始まりました。宮廷や貴族はお抱えの合唱団を持ち、また合唱団派遣プロダクションまで現れ、競って聴き映えのする合唱曲を披露しました。さらに大斎中は劇場が閉鎖されたので、有名オペラ歌手を招いて大斎の”名曲”が歌われることもありました。この時代ロシアでは優れた合唱曲がたくさん生まれましたが、「奉神礼の聖歌」という観点から見ると、「本来の姿が歪められた」と言わざるえません。

こういう傾向を生んだのには、もうひとつ大きな問題がありました。当時信徒は領聖しないのが普通でした。今はロシアでも領聖する人がたくさんありますが、当時は年に2回大祭の時に領聖すればいい、逆に、頻繁に領聖するのは不敬虔だという考えが広まっていました。そうなるか、どうなるか。聖体礼儀は「見物するもの」になります。そこから「聴衆受けする」ものを提供しようという発想が生まれてきます。神との交わりのために与えられた「音楽」は、人間の楽しみのための「音楽」にシフトしていきました。

明治の日本はどうだったでしょう。当時のロシアの影響を受けていましたが、ニコライ大主教は領聖を中心とした教会を立ててゆきました。教会の古い記録を見ると、司祭の巡回を待って、多くの信者が領聖しています。

では領聖を待つ間何を歌っていたか、と考えると、とにかく何か歌える歌を歌っておきなさい。で、適当な長さのある歌ということで、イルモスやカタワシャを歌うようになったのではないかと推測されます。それが、いつしか習慣になり、「領聖前はイルモスを歌うもの」になったと思われます。ですが「イルモス」を歌わねばならないという決まりはどこにもないし、外国でもイルモスを歌っているのは聴いたことがありません。

日本でも大規模な合唱曲が歌われたこともありますが、もう少し後の時代からで、ヤコフ・チハイ、リヴォフスキー、インノケンティ金須、大正昭和にはポクロフスキーなどが混声の聖歌隊の指導につとめ、

東京、仙台、大阪などで聖歌隊の技量が上がってからです。正教聖歌は西洋の優れた音楽芸術として内外から評価されたために、「音楽」としての側面ばかりがクローズアップされることになりました。

Slide 5

さて、では、今の教会にとって、どんな歌がふさわしいか、を考えてみましょう。現実にどんな歌が可能か、神品領聖中、信徒領聖前という場面にどんな歌がふさわしいか、あるいは、今まで習慣的に歌ってきた歌はふさわしいかどうか、「奉神礼」の流れ、信仰生活のサイクルという観点から見なおしてみたいと思います。



Slide 6

奉神礼の勉強をすると、よく耳にするのが、「準備と成就」ということばです。「斎と祭」です。準備の期間としての「斎」があって、その成就として「祭」があります。祭が終わると、この世に「派遣」されます。「準備」し、「成就」し、「派遣」される。クリスチャンの信仰生活の基本サイクルです。



S

lide 7

わかりやすいので、1年のサイクルを見てみましょう。正教徒の1年は、復活祭を目指し、復活祭に終わり、復活祭に始まり、五旬祭で派遣されます。なかでも、これから始まる大斎から復活祭の期間には、1年の準備の最終段階、復活祭という成就へ向かう歩みをはっきり見ることができます。大斎、その前の準備週から復活祭を目指す準備が始まります。



正教会の暦、奉神礼の規程では、季節、季節に印象に残る歌が配置されています。たとえば「バビロンの河辺にて」は大斎準備週の二つ目の主日「放蕩息子の主日」から大斎直前まで3回歌われます。バビロンは罪深いこの世を表しています。神を離れてこの世にどっぷり浸かっている自分に「神の国に帰ろう」と促す歌です。税吏とファリセイのスティヒラ「我に痛悔の門を啓けよ」は、悔い改めを促す歌で、大斎準備週から大斎中ずっと歌われます。

いよいよ成就の時、復活祭、その後 40 日間の復活祭期には喜びの歌「ハリストス死より復活し」が何度も歌われ、救いが完成した喜びに浸ります。

やがて五旬祭。神の聖神を受けて、復活祭で体験した喜びを知らせるために世界に派遣されます。このとき「天の王」が歌われます。

準備し、成就し、そこで受けた喜びを持って、この世、現実の世界に派遣される、それがクリス教徒の生活のサイクルです。

Slide 8

1 週間は 1 年の縮小版になっています。日曜日は復活日、ミニ復

11 流れと選曲、領聖前に何を歌うか (2022/01/15)

活祭です。日曜日の聖体礼儀に向けて準備をします。神の国の宴にあずかり、ご聖体をいただいて「平安にして出ずべし」と毎日の生活へ派遣されます。

Slide 9

1日の周期、正教会では祈りの生活のモデルは修道院の「時間の祈祷」「時課経」に従う毎日の祈祷にあります。修道院では時間を決めてお祈りが行われ、基本的には毎日聖体礼儀が行われますから、1日周期としても準備と成就、齋と祭があります。

一般信徒は修道院のお祈りの簡略版、「小祈祷書」に従って、朝晩の祈りを行います。

Slide10

日曜日の前は特別です。1週間の準備の仕上げをします。私たちのような街の教会でも、土曜日の夕方から日曜日にかけて、準備のお祈りをします。いわゆる晩禱、主日徹夜禱です。

主日徹夜禱では、晩課と早課、一時課をまとめて祈ります。「徹夜禱」と言っても日本では随分省略しているので、1時間半ぐらいで終わりますが、ロシアだと3-4時間、祈祷書どおり、省略せずに全部行えば、7、8時間かかり、本当に徹夜になります。

晩課、早課、一時課までを土曜の夕方やって、残りの三時課、六時課を朝行って、聖体礼儀を迎えます。その間に、信徒個人の準備としては、領聖預備規程を読む、禁食、痛悔などが勧められます。

聖体礼儀は成就です。祭です。1週間の準備の生活の頂点が聖体礼儀、領聖です。

Slide11

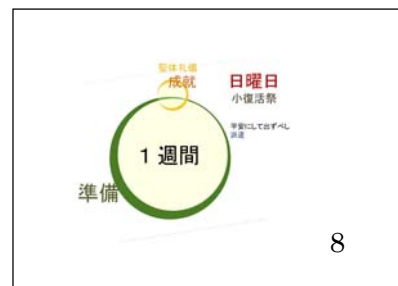
次に聖体礼儀の中での流れを見ましょう。大きく見ます。聖体礼儀そのものにも準備があり、成就があります。すべては神の方へ向かう歩みです。朝起きて、教会に集まってくるところから準備が始まります。

Slide12

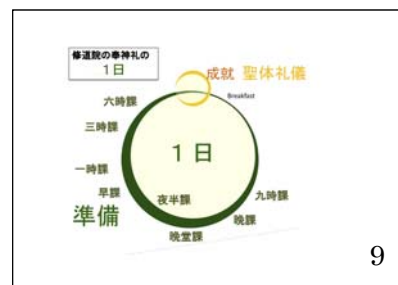
アンティフォンやトロパリは神の国に向かう行進曲です。「小聖入」は聖堂、聖なる場所に入る動きだったという話は何度もしました。ここで歌われる「来たれ、ハリストスの前に伏し拝まん」に注目してください。聖堂はハリストスがおられる場所、だから「入って行って、伏し拝みます」です。

Slide13

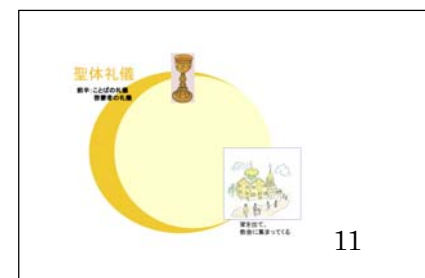
聖書を聴きます。神ことば、ハリストスご自身から「神のことば」を聴きます。



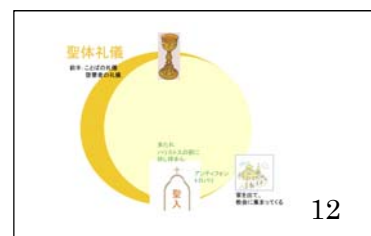
8



9



11



12



13



Slide14

信者の礼儀にはいります。ここからは、ご聖体にあずかることを許された信者だけの集まり、秘密の集まり、機密の晩餐です。捧げもののパンとぶどう酒を祭壇に運び、

Slide15

神の前で「信じます」と信仰告白し、教会が天の教会とひとつになって、捧げものを神が受け入れてくださるように、それをハリストスの体と血として与えてくださるように祈ります。

Slide16

「天にいます」は神を父と呼ぶことができるようにされた信者だけ、神の子とされてご聖体を受けることができる信者だけに与えられた特別の祈りです。聖体という食事を頂く前に「我が日用の糧を与え給え」と唱えます。

Slide17

「聖なるものは聖なる人に」とご聖体に招かれます。私たちは「聖なる人」ではないのに、満足な準備はできなかつたのに「ご聖体あげます」と呼びかけられ、至聖所では神品領聖が行われています。

Slide18

間もなく王門が開き、ご聖体を持った司祭が出てきます。アイコンが示すように、ご聖体を与えてくださるのはハリストスご自身です。「神を畏る心と信とを以て近づき来たれ」と呼びかけられ、私たちは「主は神なり、我等を照らせり」と歌います。「照らせり」ということばはギリシア語やスラブ語では「現れる、」ということばです。明治初期のスラブ語から直接訳した祈祷書では「我等に臨めり」となっています。この方が、意味が近いと思います。すなわちハリストスご自身が「私たちの前におられる」ご聖体を持って「来なさい」と招いている。そういう場面です。ハリストスご自身がご聖体を分けてくださる。

ご聖体を持って「おいで」と呼びかけるハリストスを目の前にして、どんな歌が歌いたいですか。喜びの歌、神を讃美する歌ではないでしょうか。主日領聖詞「天より主を讃め揚げよ、地より主を讃め揚げよ」は、神に創造された森羅万象、万物が神を讃めたたえる歌です。この瞬間に、実にふさわしい歌詞だと思いませんか。

Slide19-20

ではイルモスはどのように。イルモスは準備の歌です。準備の時間、早課で歌われる歌です。Click20 内容的には旧約聖書の歌が



14



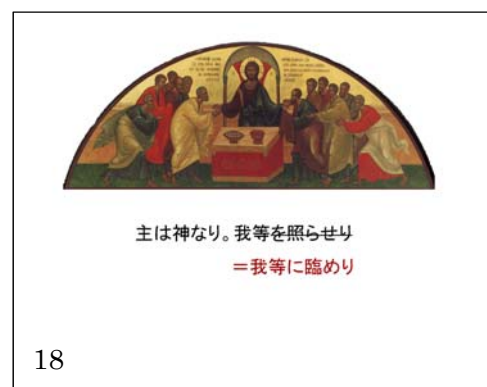
15



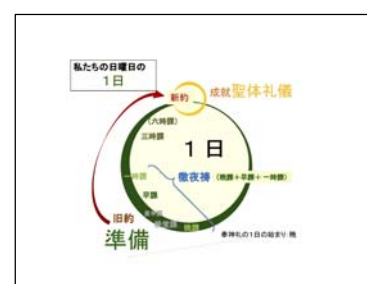
16



17



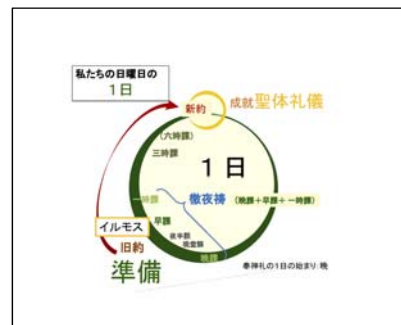
18



ベースになっていて、出エジプトの紅海を渡る話や、ヨナがクジラに飲み込まれる話が、ハリストスの救いを預言していたことが歌われます。聖体礼儀は新約の成就、救いの完成です。そのクライマックス、ハリストスのご聖体を持ってそこに居られる時に、旧約に戻って「古のイスライリは足を濡らさずして・・・」では、「出直してきます」になりませんか。

### Slide21

降誕祭のイルモス「ハリストス生まる、崇め讃めよ」のように、多くの方に愛され、祝いの雰囲気にあふれたイルモスもありますから一概にはダメとは言えませんが、少なくとも領聖前という成就のクライマックスの時間は「イルモスを歌わなければならない場面」でないことは、ご理解いただきたいと思います。



### Slide22

同じ理由から、「税吏とファリセイのスティヒラ、痛悔の門を啓けよ」や「バビロンの河辺にて」を考えてみてください。これを歌うのは、1年のサイクルでは「準備の時」です。

1日のサイクルでも歌われる時間は準備の時間、早課、朝のお祈りです。

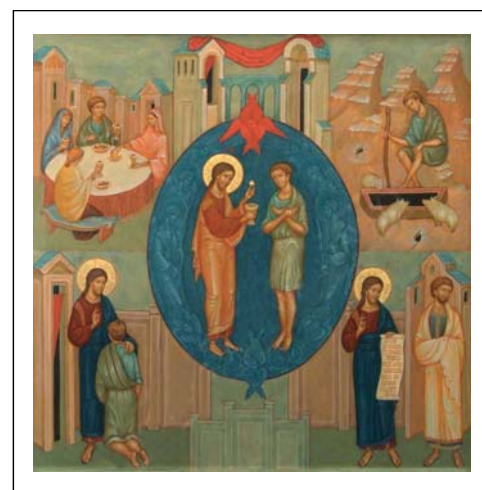


### Slide23

内容的にも、バビロンの歌は「自分はこんな遠くに来てしまった、ここにいてはいけない。放蕩息子のように神のもとに帰ろう」と、神のもとへ帰る歩みを始める歌です。土曜日の晩から準備を初めて、歩み続けて、聖体礼儀、神の国の宴にたどりついて、宴会のクライマックス、ハリストスのご聖体を持って立っている。このイコンの真ん中見てください。

私たちも自分の力では満足に準備はできなかったのに、ふさわしくなれなかったのに、それでも「来なさい」と言ってくださる神。まるで、放蕩息子のお父さんです。うなだれて帰ってきた息子を抱きしめて、宴会を開いて「さあ食べなさい」とご馳走を授けようとしている。そのときに「バビロンの河辺に立ち」では、「もう一度、バビロンに戻って豚小屋から出直します」になってしまいませんか。

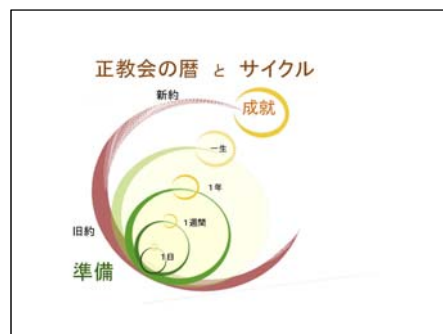
もちろん、ずっと、そう歌ってきたから何の疑問ももたなかった、あるいは、その季節の歌だから「歌いたい」「聴きたい」という方への配慮があって歌われてきたと思いますが、歌の内容や奉神礼の流れという点から考えなおしてみることも大切だと思います。



なぜなら正教の聖歌は奉神礼と一体です。聖歌のことばや配置には私たちがクリスチャンとして成長していくための教育、生活指導が組み込まれています。古代教会の聖人たちは神のメッセージを受けとって歌に書き、編纂しました。私たちは奉神礼の中で、歌いながら、聖歌を聞きながら、神の教えの重要部分を心に刻んでいきます。

#### Slide 24

準備から成就へと導く暦、1日、1週間、一年の周期、それぞれが齋と祭、準備と成就を経験するサイクルになっており、さらに一日は1週間と、1週間は1年とリンクしていて、その準備と成就の積み重ねは、一生かけて神の国に近づいていくクリスチャンの歩みをつくります。さらに大きく見れば、神の創造と救済の歴史、旧約から新約へ、神に逆らう悪の力と神との壮大な戦い、神の計画する救済のすべての歴史へとつながります。それを体験的に教えるのが正教会の「奉神礼」です。私たちは、教会とともに祈り、ご聖体を受ける生活の中で準備と成就を繰り返す中で、一生をかけて準備し、神の国へと歩みを進めます。



#### Slide 25

聖歌は礼拝のBGMでも、挿入歌でも、鑑賞するための音楽でもありません。神が分かち合ってくださいる音楽ですから、確かに美しい。でも奉神礼の一部です。神のものです。

領聖前の時間、「これでなければならない」という格別の規程はありませんから、選択の自由があります。だからこそ、ここに至る奉神礼の流れやサイクルを理解した上で、この場面に合う歌を選ぶことが求められます。それと同時にその教会や聖歌の状況への配慮も必要です。教会全体が喜びを分かち合えるような歌を、管轄司祭とともに歌う仲間たちと相談して「ふさわしい歌」を選んでください。

次回、2月19日は「領聖の歌、交わりの歌」として4世紀から歌われてきた「領聖詞」をもう少し詳しく見てみようと思います。日本語の領聖詞、歌い方も例を挙げてご紹介しましょう。聖歌のお名前シリーズ、カノンは3月に延期します。

